

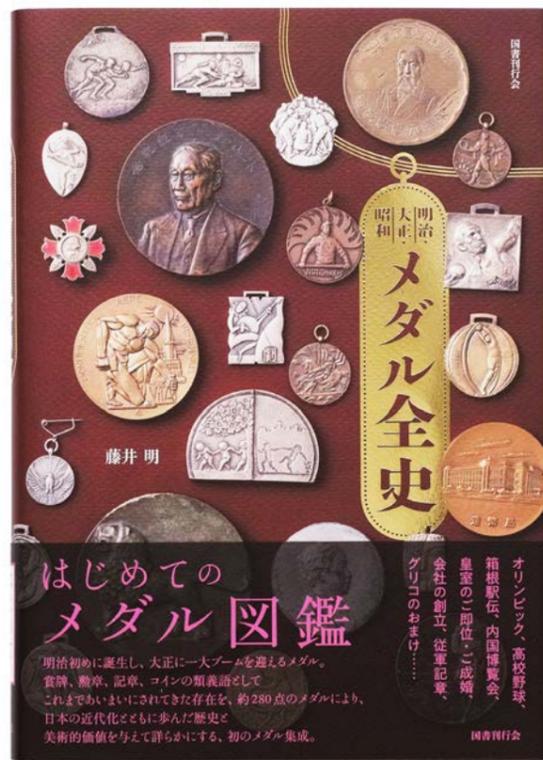
# 明治・大正・昭和

# メダル全史

藤井明

明治初めに誕生し、大正に一大ブームを迎えるメダル。賞牌、勲章、記章、コインの類義語として、あいまいにされてきた存在を、約280点のメダルにより、日本の近代化とともに歩んだ歴史と美術的価値を与えて詳らかにする、初のメダル集成。

誰もが記憶にある、  
しかし誰も知らなかった  
メダルの歴史。  
はじめてのメダル図鑑!



## 明治・大正・昭和 メダル全史

藤井明  
B5判上製 256ページ フルカラー  
定価：本体12000円+税  
ISBN978-4-336-07620-5

藤井明 ふじい・あきら

1968年石川県生まれ。青山学院大学大学院文学研究科史学専攻修了。近現代彫刻専門。小平市平櫛田中彫刻美術館学芸員として、『佐藤朝山展』『仏像インスピレーション』『メダルの魅力』(東大比較文学会CatalToオリンピック文化プログラム賞受賞)などを企画。著書に『近代日本彫刻集成』(共著、国書刊行会)、編著に『中村傳三郎美術評論集成』(国書刊行会)、『平櫛田中回顧談』(中央公論新社)など。千葉県美術館資料審査委員会(彫塑部門)委員のほか、武蔵野美術大学と放送大学で非常勤講師も務める。

### 本書の特徴

#### 圧倒的なビジュアル

メダル約280点及び参考図版約100点を掲載するオールカラー、初のメダル図鑑。オリンピックや高校野球、箱根駅伝などスポーツのほか、皇室のご即位、内閣勲業博覧会、会社創立記念、学校の記章、従軍記章、あるいはグリコのおまけなど、多種多様な造型。

#### 日本メダルの歴史を繙く

詳細な読み物として「メダルの歴史」を描く。海外ではルーヴル美術館でコレクションするなど歴史は古いが、国内では賞牌、勲章、記章、コインの類義語としてあいまいにされ研究されてこなかった。明治初めに誕生し、大正末期～昭和初期のスポーツ華やかなりし時代に一大ブーム迎え大衆文化に華を添えた存在を、さまざまな文献と取材から多角的に初めて繙く。メダルから日本の近代化を逆照射する。

#### 芸術としてのメダル

これまで芸術と見なされてこなかったメダルを位置づける初の試み。畑正吉、日名子実三、朝倉文夫、高村光太郎、岡本太郎など彫刻家・美術家関わった詳細を紹介。

### 本書をお薦めします

- ・レトロ、モダン愛好家
- ・コイン愛好家、勲章愛好家
- ・日本近代史の研究者、文学部図書館
- ・日本風俗史、大衆史の研究者
- ・彫刻研究者・愛好家、美術系大学図書館
- ・県立図書館、市町村立図書館、博物館、美術館

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15 tel.03-5970-7426 fax.03-5970-7428  
https://www.kokusho.co.jp E-mail: info@kokusho.co.jp

帖合・書店印

申込書

この注文書で最寄りの書店へお申し込みください。

国書刊行会

藤井明 『明治・大正・昭和 メダル全史』( )部 申し込みます。

定価：本体12000円+税

お名前

ご住所

お電話

国書刊行会

# 心地よい金属の重みと質感を湛える、美しき世界——

オリンピック、高校野球、箱根駅伝、内国博覧会、皇室のご即位、創立記念、従軍記章、グリコのおまけ……

組見本(原寸70%縮小)

## ようこそ、メダルの世界へ！ 藤井明

意外なことに、日本でメダルの歴史や機能を調べ、詳しく説明した書籍は、1960年代に書かれた山田盛三郎の『徽章と徽章業の歴史』を除いてこれまで皆無だった。勲章と貨幣に関するものはそれなりに書かれてきたわけだから実に不思議なことであるが、もしかしたら、定義づけのあいまいさが関係しているのかもしれない。

メダルは、誰もが知っていながら、その実ほとんど知られていないという状態に置かれてきた。いや、その事実さえ、誰も気に留めてこなかったのではなからうか。けれどもメダルには私たちが漠然と想像している以上にさまざまな用途があり、それらに着目して調べていくことで、忘れられていた人びとの記憶や出来事をよみがえらせてくれる。おそらく本書の読者は、メダルがまるで磁石のようにさまざまな出来事を引き寄せそれぞれを結びつけていく様子を、これから目のあたりにすることであろう。

さらに、メダルは美術・工芸品としても実に楽しい。その小さなフレームの中に制作者が精いっぱいの工夫をこらして創り上げた豊かな世界が広がっている。手のひらに載せたときの重量感と金属の光沢は、私たちに心地よい感覚をもたらしてくれる。本書ではさまざまなメダルをエピソードとともに取り上げ、それらの魅力に迫りながら、「メダルとは何か」についても考えていきたい。これよりあなたをめぐるめくメダルの世界へのご案内しよう。

(プロローグ「メダルとは何か」より抜粋)

### 目次

prologue メダルとは何か

i章 メダル事始

- 1. 日本メダル前史 / 2. メダルののはじまり / 3. 徽章業の誕生と発展

ii章 活用されゆくメダル

- 1. 博覧会のメダル / 2. 皇室の祝賀 / 3. 学校のメダル / 4. 会社・店舗のメダル / 5. 啓発のメダル

iii章 メダルブームの到来

- 1. 航空のメダル / 2. スポーツのメダル / 3. 活気づく徽章業 / 4. コレクターの出現 / 5. 子どもたちの憧れ / 6. メダル事件簿

iv章 彫刻家とメダル

- 1. メダルと彫刻 / 2. 岩村透と畑正吉 / 3. 日名子実三と構造社 / 4. その他の作家たち / 5. 肖像メダル

v章 戦争とメダル

- 1. 戦時下のメダル / 2. 「桃太郎さかし」とメダル / 3. 戦時下の徽章業 / 4. 今日のメダル

epilogue ふたたびメダルとは何か



### 「スミス賞牌物語」

明治期に国内で始まったメダルの製造はその後ますます盛んとなり、大正末期から昭和初年にかけて黄金時代を迎える。そのブームは次第で見るように大正期から国内でスポーツが盛んになったことが大きく関係しているが、ブームの火付け役は意外なことに航空界だった。

飛行機は1903年(明治36)にライト兄弟が世界で初めて動力飛行に成功して以降各国で実用化に向けて研究が進められていったが、1914年(大正3)に勃発した第一次世界大戦で飛行機が史上初めて戦争に使用されると、次世代の兵器として飛行機の性能と操縦術が注目されるようになった。国内における飛行機への関心はまさにこの時期から高まり、1910年(明治43)12月19日に徳川好敏と日野熊蔵が代々木練兵場で日本最初の動力飛行に成功した翌年の11年4月3日、アメリカ人飛行士J・C・マーズが、数千人が見物する東京・目黒練馬場で飛行し、賞牌(メダル)を贈られた。そして、1916年(大正5)3月に来日した、当時24歳のアメリカ人の曲芸飛行士アート・スミスが、その巧みな操縦術と人なつこいキャラクターで人気を博し、そのときもメダルが大いに関心を集めた。なおその3ヶ月前の前年12月にも、アメリカ人飛行士チャールズ・F・ナイルスが東京・青山練兵場で華麗な曲芸飛行を行い、つめかけた10万人の観衆を大いに沸かせた。

スミスは、同じ青山練兵場で4月8日から3日間の飛行大会を実施し、ナイルスの2倍を超える20万人以上の大観衆の前で宙返り飛行を披露した。その後記者団の前に姿を現したスミスは、東京市と帝国飛行協会(現・日本航空協会)からメダルが贈られることになったことを無邪気に喜び、これまで各地で獲得した8個のメダルを胸に下げて見せながらそれぞれのエピソードを語ったという(図iii-1-1)。その1週間後の4月15日と16日、その会見をもとにスミスの飛行家としての活動を紹介する記事が『東京朝日新聞』に掲載された。記事のタイトルは「スミス賞牌物語」とあり、スミスの偉業がメ



iii-1-1 「東京市からスミス氏に贈る記念のメダル」『読売新聞』1916年4月21日、5面



iii-1-2 (郵便飛行大会 優勝記念牌) 1919年、横50mm  
東京-大阪間の日本郵便飛行大会で優勝した佐藤卓飛行士に授与された。

